

第 81 回 日本核医学会 関東甲信越地方会

会期：平成 26 年 7 月 12 日（土）
 会場：富士フィルム（株）西麻布本社講堂
 港区西麻布 2-26-30
 会長：北里大学医学部 画像診断学
 井上 優介

目 次

一般演題

1. 小児核医学検査の適正投与量のガイドラインに基づく運用の経験 浅野 雄二他 430
2. FDG-PET/CT, CT 肺動脈造影、肺換気・血流シンチグラフィを施行し得た
肺動脈肉腫の 1 例 石井有佳子他 430
3. 急性肺血栓塞栓症に対する血栓溶解剤または／および抗凝固剤の
治療効果判定における CT, SPECT の役割 小須田 茂他 430
4. FDG PET/CT における進歩確認票を兼ねた検査記録の
PACS サーバ取り込みと配信について 市川 賢一他 431
5. PET/CT における CT 被ばく線量の評価法 原 敏将他 431
6. FDG-PET が診断の契機となった甲状腺機能亢進症の 1 例 片桐 真理他 431
7. Waldenström's macroglobulinemia の FDG-PET/CT 所見について 鳥井原 彰他 432
8. FDG-PET/CT にて比較的所見の乏しかった胃癌の広範骨転移の一例 真田 知英他 432
9. 咽頭扁平上皮癌の根治的化学放射線治療
—治療前 Hb 値 ($\geq 12 \text{ g/dL}$) と治療後 PET-CT の重要性 鈴木 涼子他 432
10. 連続寝台移動型 PET/CT 装置の使用経験 村上 康二他 433
11. ^{123}I -FP-CIT の CT を利用した標準脳変換による定量的評価の試み 横山 幸太他 433
12. 抗 HIV 薬により症状および画像所見が改善した
HAND (HIV 関連神経認知障害) の一例 諸岡 都他 433
13. 陳旧性心筋梗塞 PCI 後のステント留置部に生じた
IgG4 関連冠動脈周囲炎の一例
—長時間糖質制限処置下 FDG-PET による評価— 小林 靖宏他 434
14. 大動脈弁輪膿瘍の診断に Gallium-67 SPECT/CT が有用であった一例 斎藤 哲史他 434
15. 当院における ^{89}Sr 治療の初期経験 田畠 孝純他 434

特別講演

1. 原子力災害医療に向けて 中村佳代子
2. 核医学の現状と将来展望 ~日本核医学会の最近の活動~ 井上登美夫 435

一般演題

1. 小児核医学検査の適正投与量のガイドラインに基づく運用の経験

浅野 雄二 井上 優介 島田 理恵
 大塚亜沙未 鈴木 文夫 山根 拓郎
 原 敏将 (北里大・放画像診断)
 菊池 敬 (北里大病院・放部)

当院では 2013 年 4 月から核医学会の適正投与量ガイドラインに基づき小児核医学検査を施行してきた。ガイドラインに基づく予定投与量から、減衰や投与後残量を考慮して予定採取量を決定した。投与前後の放射能を測定し、測定時刻と合わせて記録した。2014 年 6 月までに施行された件数が多かったのは、腎動態シンチグラフィ 42 件、ガリウムシンチグラフィ 41 件、肺血流シンチグラフィ 39 件、腎静態シンチグラフィ 18 件、肝胆道シンチグラフィ 15 件であった。すべての検査で採取量は概ね予定通りであったが、肺血流シンチグラフィでは投与量は予定よりも少ない傾向で、ガリウムシンチグラフィでは予定よりも多い傾向であった。他の 3 検査では投与量も概ね予定通りであった。低投与量が原因で診断が困難になったと考えられた例はなかった。薬剤によって投与後残量が異なることに留意する必要があることが示唆された。

2. FDG-PET/CT, CT 肺動脈造影、肺換気・血流シンチグラフィを施行し得た肺動脈肉腫の 1 例

石井有佳子 先間 泰史 小須田 茂
 (防衛医大・放)
 京藤 幸重 (自衛隊中央病院・放)

肺内血管原発の悪性腫瘍はまれで肺動脈肉腫は画像上、慢性肺血栓塞栓症との鑑別を要する。¹⁸F-FDG PET/CT がその鑑別に有用であった症例を経験したので報告する。70 歳代の女性で糖尿病にて他院通院中であったが、4か月前から労作時呼吸苦があった。d-ダイマーは 12.0 μg/ml。肺換気・血流ミスマッチの所

見が両肺に認められ、肺血栓症が疑われた。¹⁸F-FDG PET/CT では肺動脈幹、左右肺門部、両肺に多発性的異常集積増加を認めた。胸部造影 CT で肺動脈相にて拡張した肺動脈本幹に陰影欠損像がみられ、平衡相では、病巣部は不整な増強効果を示した。肺動脈肉腫の診断と病巣の広がり、転移巣把握、治療効果判定に¹⁸F-FDG PET/CT が有用との報告がある。SUV の比較では、肺動脈肉腫 7.63 ± 2.2 、肺血栓塞栓症 2.31 ± 0.04 である。まとめとして、FDG PET/CT、CT 肺動脈造影、肺換気・血流シンチグラフィを施行し得た肺動脈肉腫の 1 例を報告した。¹⁸F-FDG PET/CT は、肺動脈肉腫と慢性肺血栓症との鑑別、病巣の広がりの把握に有用と思われた。

3. 急性肺血栓塞栓症に対する血栓溶解剤または／および抗凝固剤の治療効果判定における CT, SPECT の役割

小須田 茂	(防衛医大・放)
宮崎 浩司	(同・内)
田中 淳司	(埼玉医大・放)
本田 憲業 清水 裕次	(埼玉医大総合医療セ・放)
大河内知久 田中 修	(自治医大さいたま医療セ・放)

急性肺血栓塞栓症の診断の第一選択は MDCT であり、肺血流 SPECT を行わないまま軽快退院となっている。遺伝子組み換え組織プラスミノゲンアクチベータ (rt-PA) を実際の臨床現場で使用する症例は限られている。今回、急性肺血栓塞栓症 3 例の画像所見を提示した。MDCT 肺動脈造影よりも肺血流シンチグラフィがより正確に肺血流分布を提供した。血栓の評価と血流分布情報の相違による。肺血流分布評価は Planar 像では不十分で、SPECT を施行すべきである。解剖学的重なり合いが避けられ、半定量化が可能である。初回時には SPECT、MDCT を同時に施行すべきである。経過観察には、SPECT を優先し

て経過観察する。可能なら換気シンチグラフィを施行する。まとめとして、急性肺血栓塞栓症、3症例のMDCT 肺動脈造影、SPECT を提示した。初回時、経過観察における SPECT、SPECT/CT の有用性を再評価した。

4. FDG PET/CT における進捗確認票を兼ねた検査記録の PACS サーバ取り込みと配信について

市川 賢一 (埼玉医科大学総合医療セ・中放)
清水 裕次 本田 憲業 (同・放)

はじめに

FDG PET/CT 検査において進捗確認票を用い、それを PACS に取り込み検査画像として参照するシステムを構築したので報告する。

目的

当院での FDG PET/CT 検査において患者退出までに至る経緯と申し送り事項を、読影医 (投与指示医)、看護師、診療放射線技師で共有できるシステムを構築することを目的とする。

方法

進捗確認票は読影医、看護師、診療放射線技師で共有する必要のある項目を記載できるようなレイアウトとした。

また、進捗確認票を PACS へ取り込むシステムを構成する端末類は、心筋負荷時心電図取り込みシステムに使用している端末を流用した。

まとめ

情報の共有を目的としつつ、他の検査項目に対しても汎用性が高いシステムを構築できた。紙媒体の代わりに携帯端末などを利用することにより、検索性が低いというデメリットが解消されると思われる。

5. PET/CT における CT 被ばく線量の評価法

原 敏将 井上 優介 浅野 雄二
(北里大・放画像診断)
永原 和憲 田中 祐人 宮武比呂樹
秦 博文 (北里大病院・放部)
工藤 考将 (北里大医学部)

[目的] PET/CT の CT による被ばく線量を様々な方法で算出し、簡便な評価法を検討した。

[方法] 腫瘍 FDG PET/CT を施行された男性 10 例、女性 10 例を対象とした。以下の方法で実効線量を算出した。1) 装置で自動計算される DLP に体幹部用換算係数を乗じる。2) 解剖学的領域毎の DLP を算出し、各領域の換算係数を乗じる。3) 被ばく線量評価ソフト CT-Expo を用い、領域毎に実効線量を求める。電流値としては各領域の平均値を入力する。4) CT-Expo を用いるが、入力する電流値を処理者が決定する。

[結果] 方法 1)~4) による実効線量はそれぞれ 5.20 ± 1.17 , 4.00 ± 0.91 , 4.45 ± 0.80 , 4.42 ± 0.74 mSv であった。DLP に 0.013 を乗じると、CT-Expo と同様の実効線量が得られた。

[結語] DLP に体幹部換算係数 0.015 を乗じると、実効線量を過大評価し、0.013 の使用が適切と考えられた。

6. FDG-PET が診断の契機となった甲状腺機能亢進症の 1 例

片桐 真理 岩渕 雄 中原 理紀
村上 康二 (慶應大・放診断)

症例は 20 歳代女性。他院にて子宮頸癌と診断され、子宮頸部切除術を希望し当院を紹介受診した。コルポスコピーでは子宮頸部 9 時方向に 1 cm 大の膨隆性病変を認めた。MRI 検査ではコルポスコピー所見と一致する病変は認められなかった。全身の転移検索目的に施行された FDG-PET 検査では、子宮頸部の集積に加え、全身の骨格筋および前縦隔に FDG 集積を認め、子宮頸癌、甲状腺機能亢進症、甲状腺機能亢進症に伴う二次性的胸腺過形成が疑われた。甲状腺超音波検査では甲状腺両葉の血流亢進を認めた。血液検査では甲状腺ホルモン FT3, FT4, TSAb の高値、TSH の低値を認め、甲状腺機能亢進症と診断された。内服治療にて甲状腺ホルモン値が正常化した後、レーザー子宮円錐切除術が施行された。今後は深達度の評価を行い、子宮頸部切除術・子宮全摘術の適応を決定する予定である。甲状腺機能亢進症と骨格筋の FDG 集積、胸腺過形成に関して、若干の文献的考察を加え報告した。

7. Waldenström's macroglobulinemia の FDG-PET/CT 所見について

鳥井原 彰 中館 雅志 藤岡 友之
 久保田一徳 大橋 勇
 (東京医歯大・放診断)
 福田 哲也 長尾 俊景 (同・血液内)

当院で経験した Waldenström's macroglobulinemia の FDG-PET/CT 症例のうち、過去の治療歴や他の悪性腫瘍の既往を有さない 4 例（全例男性、57-70 歳）について、画像所見を検討した。4 例とも PET/CT 前後の血液検査で血中 IgM 上昇を認めた（485-4570 mg/dl）。PET/CT 上、全例で肋骨、四肢長幹骨を含めた骨髄へのびまん性集積亢進を認めた（SUVmax = 3.31-3.83）。多発リンパ節病変も全例で認めたが、2 例は病変への FDG 集積が比較的軽度であった（SUVmax < 3.00）。脾腫は 1 例で認め、肝よりわずかに高い FDG 集積を呈した。2 例は治療後にも PET/CT が施行され、血中 IgM の低下と合致した画像所見の改善を認めた。本疾患の FDG-PET/CT 所見に関する見解は少なく、若干の考察と共に報告した。

8. FDG-PET/CT にて比較的所見の乏しかった胃癌の広範骨転移の一例

眞田 知英 小泉 潔 今泉 雅博
 大高 純 吉田さやか 高橋 佳子
 大久保 充 (東京医大八王子医療セ・放)
 渡辺 隆文 渡邊 充 片柳 創
 壽美 哲生 (同・消化器外)

FDG-PET/CT にて比較的所見の乏しかった胃癌の広範骨転移の一例を経験したので報告する。

症例は 50 歳代の男性。20XX 年健診の消化管造影で異常を指摘され、上部消化管内視鏡施行。生検で印環細胞癌と診断され、幽門側胃切除施行。術後 TS-1 内服を 8 コース行った。フォローの上部消化管内視鏡で残胃に再発を指摘。遠隔転移精査にて FDG-PET/CT 施行。残胃に軽度集積を認めたほかは明らかな異常集積は認めなかった。残胃再発に対し、残胃全摘出施行。その後腫瘍マーカー上昇を認め、再度 FDG-PET/CT 施行。中心骨への集積がびまん性に軽度亢進し、CT 上淡い濃度上昇を認めた。ALP 高値を

認めたため、骨シンチグラフィを撮影。全身骨に多発する集積あり、多発骨転移と診断された。FDG 集積が乏しかったのは、骨転移巣の腫瘍細胞数が相対的に少なかったためと考えられた。このような FDG 集積の低い症例では FDG-PET/CT だけではなく骨シンチグラフィも必要と考える。

9. 咽頭扁平上皮癌の根治的化学放射線治療—治療前 Hb 値 ($\geq 12 \text{ g/dl}$) と治療後 PET-CT の重要性

鈴木 涼子 (横浜市大市民総合医療セ・放)
 幡多 政治 立石宇貴秀 井上登美夫
 (横浜市大・放)
 田口 享秀 (同・耳鼻咽喉)
 高野 祥子 大村 素子
 (湘南鎌倉総合病院・放腫瘍)

目的：咽頭扁平上皮癌（上・中・下咽頭）の根治的化学放射線治療において、生存率・局所制御率・遠隔転移制御率の予後因子となるものを検討した。

方法：2006 年 7 月～2012 年 4 月横浜市立大学付属病院で治療前後に PET-CT を受け、咽頭癌に対し根治的化学放射線治療を行った 70 人の患者をレトロスペクティブに調査した。治療前 Hb 値、治療前後 PET-CT の原発巣および転移リンパ節 SUVmax 値を含む 16 因子について解析した。

結果：多変量解析において、生存率および局所制御率の予後良好因子は、治療前 Hb 値 ($\geq 12 \text{ g/dl}$) ($p=0.020, p=0.028$) と、原発巣の治療後 SUVmax 値 (< 5.00) ($p=0.039, p=0.007$) であった。遠隔転移制御率と関連する予後因子は見つからなかった。

結論：咽頭扁平上皮癌の根治的化学放射線治療において、治療前 Hb 値と治療後 PET-CT の原発巣 SUVmax 値が重要な予後因子となることが分かった。治療前 Hb 値が 12 g/dl 未満である患者は予後が悪い傾向にある。治療後 PET-CT で原発巣 SUVmax 値の場合、追加治療の必要性を示唆している可能性がある。

10. 連続寝台移動型 PET/CT 装置の使用経験

村上 康二 中原 理紀 緒方 雄史
古賀 清子 岩渕 雄 片桐 真理
亀山 征史 (慶應大・放核)

本年 2 月よりシーメンス社の連続寝台移動型 PET/CT 装置 mCT flow motion が導入されたため、その使用経験を報告する。連続診断移動型 PET/CT 装置は寝台が連続的に移動しながら撮影する機構であり (Flow Motion Technology ; 以下 FMT)，従来の撮影法、つまり撮影→寝台移動を繰り返す方法 (Step and Shoot; 以下 SS) とは全く異なる画像収集法を採用した機種である。今回はこの FMT のファントム実験と臨床データを解析した。

ファントム実験や臨床画像評価には PET/CT 撮影ガイドラインに沿った方法で行った。

その結果、同じ撮影範囲・撮像時間では FMT と SS はほぼ同等（広い撮像範囲の方が FMT 有利）の画質を有していた。また定量性は SS と FMT ではなく同等であるが、SUV の値は FMT の方が SS よりも約 5.7% 低い値が出た。また SUVmax の標準偏差 SUVstd を比較すると FMT の方が SS よりも約 16% 低い値が出た。この結果から FMT の方が SS よりも均一性に優れることが示唆された。SUVmax 値が FMT で低く出る傾向も画像ノイズが減少することに起因する可能性がある。

11. ^{123}I -FP-CIT の CT を利用した標準脳変換による定量的評価の試み

横山 幸太 佐藤 典子 坂本 敦子
下地 啓五 (国立精神神経医療研究セ・放)
今林 悅子 松田 博史
(同・脳病態統合イメージングセ)
村田 美穂 (同・神経内)

〔目的〕 ^{123}I -FP-CIT 画像では解剖学的標準脳上での定量的評価が有用である。われわれは SPECT/CT の CT 画像を用いて、SPECT 画像の標準脳への変換を試みた。

〔方法〕 装置は SIEMENS 社製 SPECT/CT 装置 SymbiaT6、コリメータは LMEGP を使用。35 名のパーキンソン症候群 (PS) 疑いの患者（男性 20 名、女

性 15 名、68.2±11.4 歳、40~84 歳）を retrospective に検討した。SPM12 β を用いて CT より灰白質画像を抽出、DARTEL で標準脳へ変換し、このパラメータにより SPECT 画像を変換し、線条体と後頭葉に関心領域を設置。特異的結合能を求めた。集積部位の差も検討するため、線条体内的領域を細かく分類し、VOI を作成し、検討を行った。

〔結果〕 PS 群では有意に特異的結合能が低かった。標準脳変換により VOI を細かく設定した方がコントラストがより明瞭となる傾向がみられた。

〔結論〕 SPECT/CT の CT を利用した ^{123}I -FP-CIT 画像の標準脳変換は、PS の判別に有用であった。

12. 抗 HIV 薬により症状および画像所見が改善した HAND (HIV 関連神経認知障害) の一例

諸岡 都 岡崎 百子 宮田 陽子
窪田 和雄 (国立国際医療研究セ・放核)

抗 HIV 薬により患者の生命予後の改善とともに非 AIDS 合併症の問題が脚光を浴びてきた。中でも HIV ウィルス感染に伴う認知機能障害 HAND は、早期抗 HIV 薬投与がその重症化を止めることができ明らかになりトピックスとなっている。放射線科医になじみのある従来のいわゆる「HIV 脳症」の MRI 所見はほとんど姿を消し、代わって軽症で画像所見も正常と著変ない軽症型 HAND が著しく増加した。外来では発見しにくいこともあり、いかに MRI や PET でその病態を捕らえるか、画像評価が期待され花盛りとなっている。ただし、画像とともに HAND を網羅した神経心理学的検査でも評価を行った研究は少ない。

今回われわれは、軽症型 HAND の患者に、抗 HIV 薬を投与する前後で HAND を網羅した神経心理学的検査と画像検査 (MRI, PET) を施行し、症状・画像とともに改善した例を経験したので報告した。

**13. 陳旧性心筋梗塞 PCI 後のステント留置部に生じた IgG4 関連冠動脈周囲炎の一例
—長時間糖質制限処置下 FDG-PET による評価—**

小林 靖宏 福嶋 善光 石原 圭一
汲田伸一郎 (日本医大・放)
飽本 哲兵 (同・消化器肝臓内)

IgG4 関連疾患は全身諸臓器に IgG4 陽性形質細胞浸潤を生じ、血管では外膜周囲に浸潤することが知られている。今回われわれは生理的心筋集積抑制処置である糖質制限下 FDG-PET にて陳旧性心筋梗塞 PCI 後の stent 留置部周囲に IgG4 関連血管周囲炎を検出した症例を経験したので報告する。症例は 60 代男性。3 年前に LAD-OMI の既往あり、肝機能障害および脾の限局性腫脹を認め、血清 IgG4 高値を認めたことから自己免疫性脾炎 type I の診断が下された。全身の炎症評価を目的に糖質制限下 FDG-PET を施行したところ、脾、唾液腺、前立腺などに活動性炎症を示唆する集積亢進が見られたほか、ステント留置部に一致した高度集積が確認された。冠動脈 CT にて確認したところ、外径 14 mm・全周性、後期相にて濃染する壁肥厚を認めた。糖質制限下 FDG-PET/CT が冠動脈病変を含めた IgG4 関連疾患のスクリーニングに有用である可能性が示唆された。当院の IgG4 関連疾患の心臓・血管病変の過去の経験と文献的考察を踏まえて報告した。

14. 大動脈弁輪膿瘍の診断に Gallium-67 SPECT/CT が有用であった一例

齋藤 哲史 近森大志郎 肥田 敏
黒羽根彩子 五十嵐祐子 山科 章
(東京医大・循内)
吉村 真奈 徳植 公一 (同・放)

症例は 44 歳男性。38°C を超える間欠熱があり 1 カ月以上続くため近医を受診した。診察時に心雜音を指摘され、精査で大動脈二尖弁および大動脈弁狭窄症を認めた。不明熱および弁膜症があり感染性心内膜炎が疑われ当院へ紹介となった。炎症反応は軽度

であり、外来で施行した血液培養検査はすべて陰性であった。弁膜症を有した患者の不明熱であり、感染性心内膜炎を強く疑い入院となった。経食道心エコー図検査を行ったが大動脈弁は高度な石灰化を伴っており、疣膜の付着の判定は困難であった。第 13 病日に Gallium-67 SPECT/CT を施行し、大動脈弁の石灰化部位に一致した高度な集積を認めた。心エコー図検査の画像と合わせて大動脈弁輪膿瘍と診断し第 22 病日に外科手術を行った。術後経過は良好であり第 55 病日に退院となった。初期の心エコー図検査、経食道心エコー図検査では診断の特定には至らなかつたが、Gallium-67 SPECT/CT の併用が大動脈弁輪膿瘍の診断に有用と考えられた 1 例を経験したため報告した。

15. 当院における ⁸⁹Sr 治療の初期経験

田畠 孝純 斎藤アンネ優子
山岸 亮平 八代 大祐 田中 史根
菊地 奈央 井上 達朗 君塚 孝雄
京極 伸介 (順天堂大浦安病院・放)

[目的] 当院における ⁸⁹Sr 治療の効果、副作用を検討する。

[対象] 2012 年 3 月から 2014 年 5 月の期間で、初回投与を行った 26 例を対象とする。

[方法] 初回投与例 26 例のうち、転院などで評価不能であった 3 例を除いた 23 例について、当時のカルテ記載を参照し、投与後半年間の除痛効果を検討する。また、骨髄抑制の程度についても CTCAEgrade を元に評価する。

[結果] 1 か月後の時点で約 7 割の症例で除痛効果が得られた。原疾患により死亡した例を除き、多くの例で効果は半年間持続していた。1 例で重篤な骨髄抑制を認めたが、副作用は許容範囲内であった。

[考察] ⁸⁹Sr は良好な除痛効果を示すが、化学療法の併用時期については注意が必要である。

[結論] 今後多くの適応症例に使用されるべき薬剤と考えられる。

特 別 講 演

1. 原子力災害医療に向けて

中村佳代子 (原子力規制委員会委員)

2. 核医学の現状と将来展望**～日本核医学会の最近の活動～**

井上登美夫 (日本核医学会理事長,
横浜市立大学医学部・放射線医学)

現在のわが国の核医学検査の動向を知るうえで、
日本アイソトープ協会が 5 年ごとに実施している全
国核医学診療実態調査の結果は重要なメッセージを
投げかけている。PET 検査を除く一般の核医学総検
査件数は 1997 年の 186 万件をピークとして、減少し

続け 2012 年の最新のデータでは 115 万と減少してい
る。一方で、PET 検査は 1997 年の 1 万件から 2012
年は 58 万件と急増している。また、RI 内用療法も
1997 年の 3,000 件から、2012 年の 10,000 件に増加し
ている。日本核医学会ではこの動向を注視し、“分子
イメージング戦略会議”と“RI 内用療法戦略会議”
の 2 つの戦略的会議を時限的に設立し、活動を行っ
ている。また、PET/MR や PEM といった新たな医療
機器の薬事承認と合わせてガイドライン作成を行っ
てきた。

最後に、社会全体の動きであるグローバリゼーション
に関して “わが国の核医学会の活動がどうあるべきか” の私見を述べさせていただいた。

○ 抄録差し替えのお願い ○

核医学第 51 卷第 2 号（58～59 頁）掲載の第 79 回日本核医学会関東甲信越地方会、演題番号 11 の抄録本文が取り違えて掲載されました。お詫びして訂正いたします。

正

11. 後頭葉に著明な PiB 集積を認めた若年性認知症の一例

伊藤 公輝 中田 安浩 神谷 昂平

重本 蓉子 佐藤 典子

(国立精神神経医療研究セ病院・放)

佐野 輝明 大矢 寧 (同・神経内)

松田 博史 (同・脳病態統合イメージングセ)

若年性認知症患者に ¹¹C-PiB PET を行い、著明な後頭葉の集積を認めたため報告する。症例は 40 代女性、主訴は筋力低下と進行性の認知症。家族歴は祖母、父、叔母に類症が疑われ、父親は生前、臨床的に筋緊張性ジストロフィ (MyD) と診断されていた。患者

は 30 代後半より筋力低下と筋緊張亢進がみられたが、MyD の遺伝子検査で陰性であった。当院を受診時、MMSE 15 点（遅延再生 0/6）、RBMT 4/26 点（プロフィール）と認知機能低下が見られた。MRI では明らかな異常は見られず、脳血流 SPECT では右頭頂葉から側頭葉の低下が見られた。PiB PET が施行され後頭葉の著明な集積が見られた。後部帯状回や頭頂葉に高度な PiB 集積は認められなかった。MIBG シンチで異常は認められなかった。髄液検査にて A_β の低下とタウ蛋白の上昇が認められた。われわれの知る限りではこのような分布の PiB PET 集積の報告はない。臨床や髄液検査からタウオパチーが疑われるが、現時点では診断は確定されていない。